

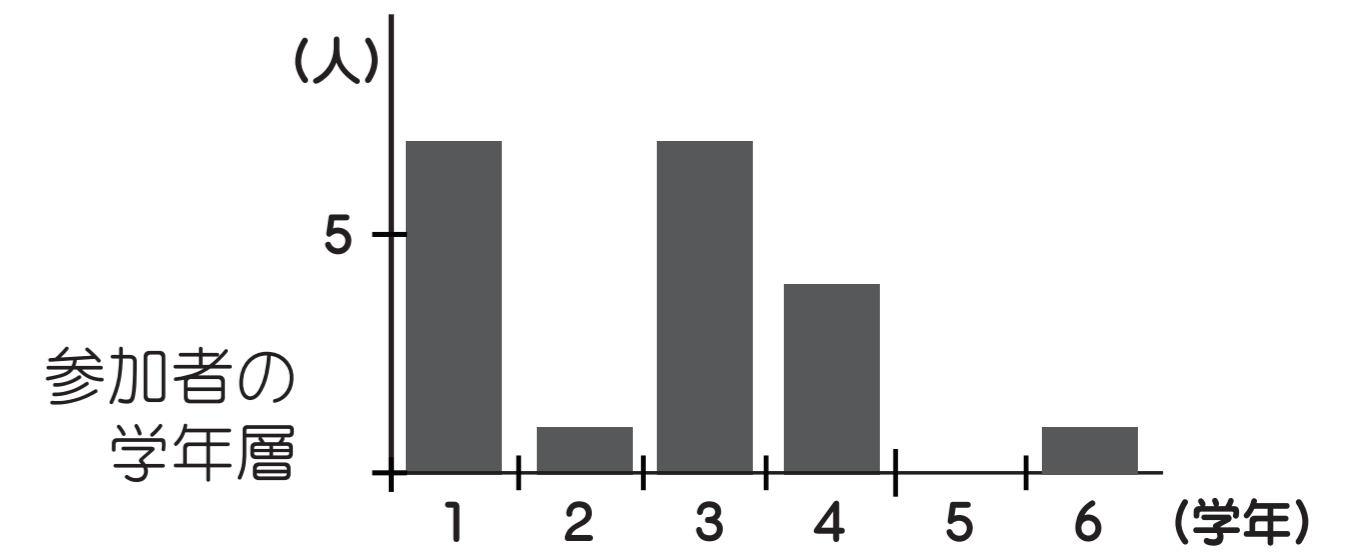
## はじめに

内部構造がわかりやすく、食材としても身近な存在であるイカは、授業やイベント等で解剖材料として使われている。一方、生きものの解剖は近年の学校教育から離れつつあり、生きものと触れ合う機会や解剖経験のない子どもも少なくない。本研究では、足立区生物園で行われたプログラム「イカスミで書初め」におけるイカの解剖を通し、幅広い対象への解剖プログラムが、生物学や解剖観察のきっかけとして効果があるのか改めて検討した。



## 方法と結果

本プログラムは、「イカの体のつくりと暮らす環境の関係について考えること」をねらいとした。プログラム前後に「イカのイメージに合う言葉」を5つまで書いてもらい、イメージの変化から解剖が参加者に与えた効果を検討する。また、解剖の前中後に参加者の声や様子について可能な限り聞き取りを行う。



プログラムの流れ	イメージ調査1	イカクイズ (15分) ・外部形態の観察 ・腕の数、頭部や口の位置	イカの解剖 (60分) ・墨袋の取り出し ・エラ、消化器官、軟甲、眼の観察	書初め (45分) ・イカスミで書初め ・展覧会	イメージ調査2
期待される効果		イカのイメージと実物の確認 (足の数、大きさ、触感など) 触る機会のないイカに慣れる	解剖バサミの使い方に慣れる 体の構造を見る解剖観察に興味を持つ 体構造と暮らす環境との関係に気づく		イカスミの利用性に気づく

- ・言葉を失う
- ・つめたい、きもちわるい
- ・触れられず、口や眼がみつけれない  
→みつけた時喜び、周りの人に伝える



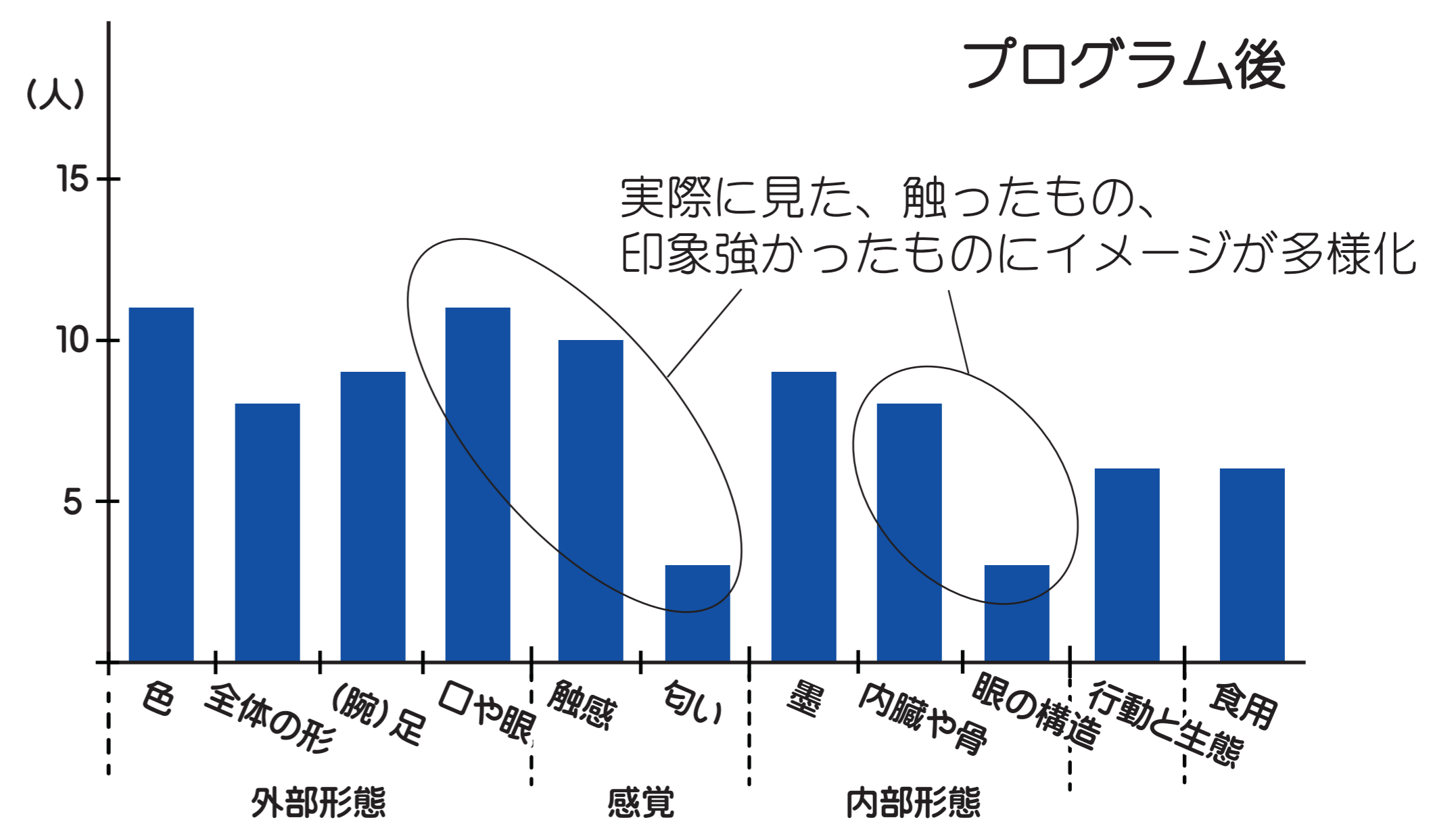
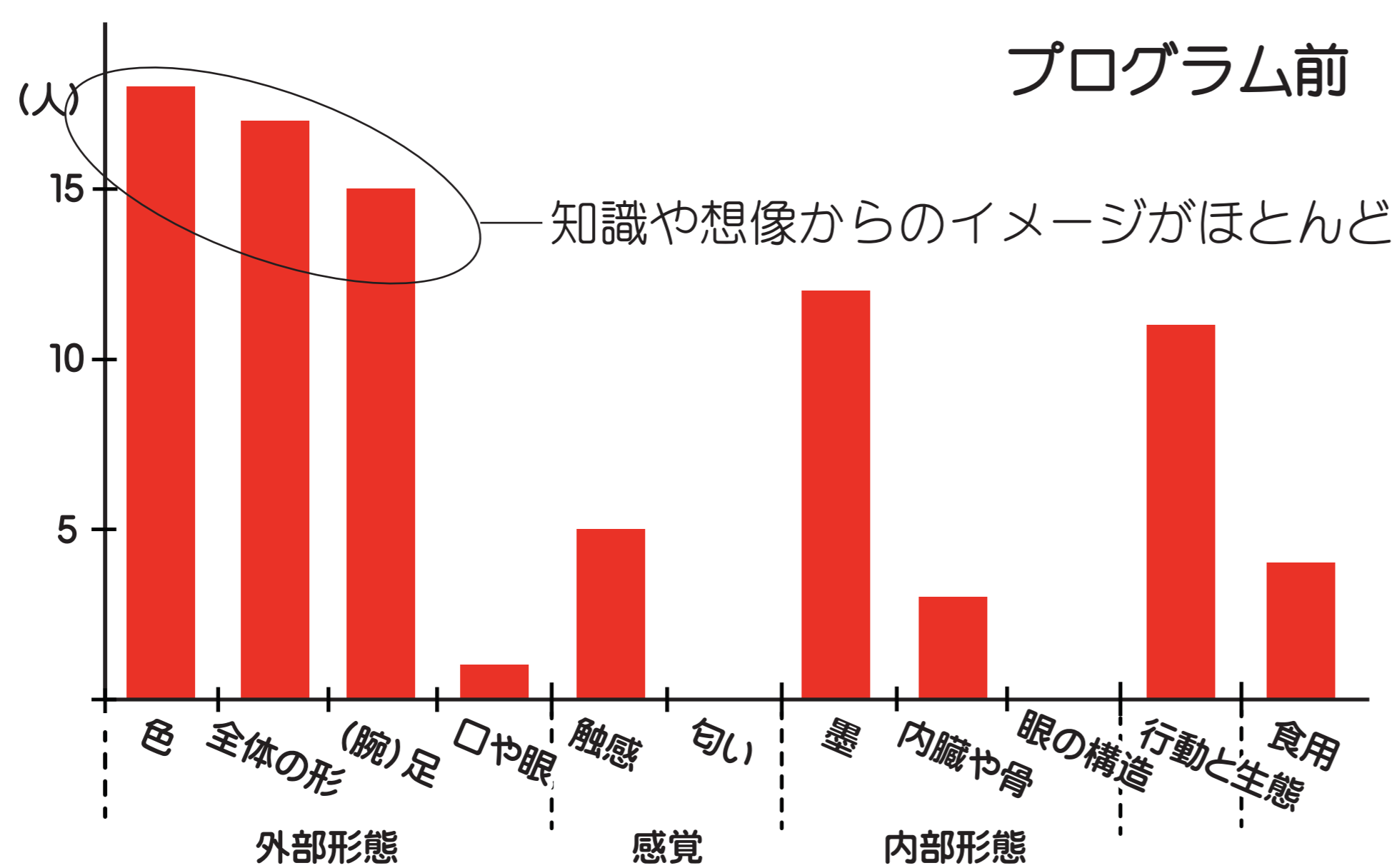
- ・道具(ハサミ、ピンセット)を持つことで意欲的に
- ・切り始めは慎重、内臓が触れない  
→発見やできる喜びで徐々に平気に  
→隣同士で教え合う



- ・質問にくる
- ・水晶体、カラストンビなど持ち帰る
- ・家に帰ってからやろう



## イメージ調査結果



解剖を通して、生きものとしてのイカの体のつくりに興味をもたせることができた。

## 考察と展望

小学生でもイカの解剖の実施、興味を引き出しが可能であることがわかった。一方、様々な学年、経験をもつ参加者がいることで知識や技術に差がみられたが、互いの発見を共有することが興味を引き出す助けになった。しかし、実際に見たものから「暮らす環境との関係」を考察する段階まで達することはできなかった。

生物園が提供するイカの解剖プログラムは、生きものと触れ合う機会が少なく、解剖の経験のない子どもたちが、生きものの解剖観察に興味をもつきっかけとして効果的であることが確認された。

今後は、生物園におけるプログラムの効果の検討を重ね、基礎生物学に興味を持つきっかけとなるようなプログラムの開発を試みたい。